

IV-29

高齢者からみた道路の快適性に関する評価について

秋田大学 正 員 清水浩志郎
秋田大学 正 員 木村 一裕
秋田大学 学生員 ○馬場 康至

1. はじめに

現在わが国は急速に高齢化が進んでおり、高齢者率は11.6%から平成12年（2000年）には16.2%にも増加するといわれている。高齢化社会において高齢者は地域活動に不可欠な存在であり、社会の重要な一翼を担ってもらわねばならない。そのためには、何かとひきこもりがちな高齢者が、積極的に社会参加できるような環境づくりが必要になってくる。高齢者は徒歩による外出が多いことから、道路整備も環境づくりの重要な要因の一つに挙げられる。

そこで本研究では、居住地周辺道路の快適性についてのアンケートを実施し、高齢者の道路に対する評価特性を明らかにするとともに、高齢者に配慮した道路整備について考察する。

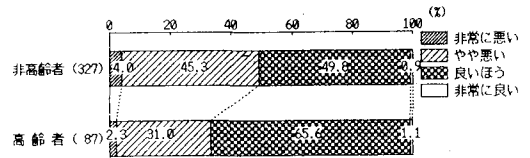


図-1 道路の快適性に関する総合評価

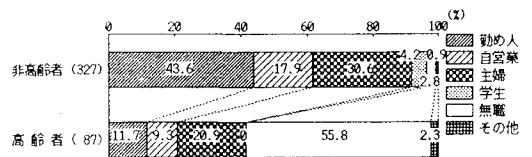


図-2 職業

2. 調査の概要

秋田市在住の20歳以上の人を対象者とし、調査は平成元年11月に留置法により実施した。回収数は436票で、そのうち有効票は414票（有効回答率は95.0%）であり、回答者のうち高齢者（60歳以上の人）と非高齢者（60歳未満の人）は、それぞれ87人（21.0%）と327人（79.0%）であった。アンケートでは、居住地周辺道路の「環境」、「歩きやすさ」、「景観」についてのいくつかの要因を、「非常に良い」「良いほう」「悪いほう」「非常に悪い」の4段階で評価してもらった。

3. 調査結果と分析

（1）道路の快適性についての総合評価

「道路の快適性」については、高齢者より非高齢者のほうが厳しい評価をしており（図-1）、道路の「景観」や「環境」、「歩きやすさ」についても同様の傾向がみられた。全体的に非高齢者のほうが道路に対する不満が多い。

（2）道路の快適性に関する要因

図-3 (A), (B)は高次レベルの評価を外的基準とし、低次レベルの評価を説明変数として、数量化理論Ⅱ類で解析したときの偏相関係数を、それぞれのレベルでの最大値で除した値を表示し、道路の快適性の評価において、どのような要因がどの程度の割合で関係しているかを示している。

レベル1とレベル2の関係を見ると、「道路の快適性」に関して高齢者と非高齢者の両者ともに「道路の景観」が最も上位に位置している。非高齢者はその次に「道路の歩きやすさ」が「道路の景観」と同じくらいの位置にあり、次いで「道路の環境」がかなり下位に位置している。しかし高齢者は「道路の景観」の次に「道路の環境」と「歩きやすさ」がほぼ中位に位置している。図-2にみるように半数以上の高齢者は非就業者であり、一般的に外出率が低く、道路を歩く機会が少ないためだと思われる。

（3）道路の景観に関する要因

レベル2の「道路の景観」とそれに属するレベル3の関係を見ると、「道路の景観」に関して高齢者と非高齢者ともに「標識や信号の色や形」は上位に



図-3 居住地周辺の快適性に関する評価構造

位置し、「道路の標識の数」は下位に位置している。また「道路の緑の量」は高齢者のほうが上位にあり、「電柱や看板の数」は非高齢者のほうが上位になっている。

(4) 道路の環境に關係する要因

レベル2の「道路の環境」とそれに属するレベル3の關係を見ると、「道路の環境」に関して、高齢者と非高齢者の両者とも「道路上のゴミ」や「自動車からの騒音」が上位に位置している。

(5) 道路の歩きやすさに關係する要因

レベル2の「道路の歩きやすさ」とそれに属するレベル3との關係を見ると、「道路の歩きやすさ」に関して、高齢者と非高齢者の両者とも「道路の路面状況」や「積雪時の歩道の除雪」が上位に位置している。また「歩行者用の信号の数」や「自転車からの安全」は高齢者のほうが上位にあり、「横断歩道の間隔」や「車からの安全」は非高齢者のほうが上位にある。高齢者の評価で「自転車からの安全」が第1位に位置しているのは、高齢者は車道を走る車よりも歩道を走る自転車のほうが気になるという

ことであろう。

4. まとめ

本研究では、アンケート調査の結果から居住地周辺道路に関する高齢者の評価特性について検討してきた。その結果、「道路の快適性」に関しては、高齢者より非高齢者のほうが一般的に厳しい評価が与えられ、高齢者の評価の中では、「道路の歩きやすさ」よりも「道路の景観」や「道路の環境」のほうが強く影響を与えることがわかった。

したがって、道路を高齢者にとって利用しやすくするためには、歩道の路面整備や自転車と歩行者を分離するなどの対策に加え、標識や信号の色や形を整えたり、違法駐車や駐輪そして道路上のゴミを無くしたりすることが重要だと言える。

今後の課題としては、道路の緑の量や歩道の幅などを、物理的な量との関係で捉えるような研究が重要である。

なお、本研究で用いたアンケートは、東北地方道路計画研究会が「道路の快適性に関する実態調査」と題して作成したアンケートの一部を利用させていただいた。